様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 １４ 日現在

機関番号：３３３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７７００４０

研究課題名（和文）西洋音楽受容に関する一考察―アドルフォ・サルコリと日本の声楽界―

研究課題名（英文）A study of western vocal music acceptance of Japan.

研究代表者
直江　学美（Naoe, Manami）

金沢星稜大学・人間科学部・准教授

研究者番号：９０４６８９７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：アドルフォ・サルコリの演奏活動の調査を2014年にフィリピン、2015年にルーマニアで行った。サルコリはフィリピンで1910年12月11日から1911年1月25日の間に6演目のオペラに出演し主役級の役を演じたこと、ルーマニアでの共演者はイタリアやアメリカで活躍した人物であることをみつけた。
本研究では、サルコリは多くのオペラレパートリー、そして世界につながるネットワークを持って来日した事を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I investigated Adolfo Sarcoli’s singing activities in Philippine in 2014, and in Romania in 2015.In Philippine, Sarcoli played a leading role in six operas from 11 December 1910 to 25 January 1911.In Romania,He also acted Operas with musicians,who often appeared on the stage at the famous theaters in Italy and the United State of America.
In this study, I found out that Sarcoli came to Japan, having a large repertoire of opera songs and the worldwide connection with musicians.

研究分野：音楽学

キーワード：アドルフォ・サルコリ　イタリアオペラ　声楽　西洋音楽受容

１．研究開始当初の背景

アドルド・サルコリ(1867-1936)は,四谷の自宅を教授場とし，三浦環,関屋敏子,原信子らを育て,海外で活躍させたか。サルコリはたまたまイタリアから持参した「蝶々夫人」の楽譜を三浦環に与え，結果，三浦は後に世界で「蝶々夫人」として活躍することとなった。このように，サルコリは,日本の西洋音楽受容のきっかけの一つとなっている。

サルコリは,当時の新聞や音楽雑誌では多く取り上げられているものの,現在では忘れられ，また人物像も明らかになっていない部分が多い。サルコリの音楽活動,人物像の掘り起こしは,日本の西洋音楽受容史にとって必要かつ急務と考えた。

２．研究の目的

サルコリの音楽活動に光を当て，日本の西洋声楽受容史を考察したい。

日本の声楽界に影響を与えたサルコリは,イタリアでどのような音楽活動をし,そして音楽家としてどのようなネットワークを持っていたのだろか。これらを明らかにする事が今回の研究の課題である。サルコリの活動や人物像を明らかにすることは，サルコリの影響が日本の声楽界にとってどのようなものであったのかを，そして，日本が受 容 してきた西洋声楽の歴史を考察する上で欠かすことができない。

そのためにも,本研究では,日本では伝聞でしか伝わっていないサルコリの来日以前の活動を中心に調査を行い,西洋声楽受容の一端を大きく担ったサルコリの活動に光を当て，日本における西洋声楽受容史の考察の一助とすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は,明治44年(1911)の来日以前にサルコリが行った演奏活動の調査を主に行う。サルコリは,1910年末から1911年初頭にかけてフィリピンに,また,1904年以降,1910年までの間にルーマニアを 4 回訪れ,演奏活動を行ったことが分かっている。滞在していたと思われる時期の新聞や雑誌等で演奏活動を調査する。

今回,2013年2月はフィリピンで,2014年8月にルーマニアでそれぞれ現地調査を行った。

４．研究成果

(1)フィリピンでの調査

サルコリの遺品の中にスペイン語で書かれ,当時ビサヤ諸島で最高購読数を誇った新聞”El Tiempo”紙がある。サルコリが歌った記事が見られ,日付は，1911 年 2 月 12 日(日)である。記事には「オペラアーチストたち“アドルフォ・サルコリ”」との見出しがつけられ,次のような文面であった。「有名なテノールオペラ歌手サルコリ氏は読者諸氏に紹介するまでもない。〈ルチア〉を歌った夜，劇場を「オ・グラン・コンプレ」すなわちぎっしり全席満席にし，たくさんの聴衆から盛大な拍手を勝ち取ったあの夜，ほんどの読者諸氏に彼自身が自己紹介したのだから。サルコリ氏はシエナ(イタリア)に生まれ，フィレンツェの音楽院で学んだ。23 歳のとき生まれ故郷にて〈ジョコンダ〉てデビュー。以来，これまで多くの名高い劇場で歌っ て き た。例えば，ローマ，フィレンツェ，ミラノ，トリノ，ナポリ，カイロ，アレキサンドリア，トリエステ，ブカレスト，アテネ，ビルバオ，その他，ヨーロッパ各地の劇場，そして，最近はマニラで歌い，新聞は多くの賛辞を捧げた。それは，聴衆が彼に下したアーチストと歌手の至高かつ確定的審判の反映であった。サルコリ氏のレパートリーは広範囲かつ多岐にわたり，多様な，しかも相反する流派をも包括する。例えば〈ルチア〉と〈ローエングリン〉〈アイーダ〉と〈カルメン〉。さらに〈トスカ〉〈ボエーム〉〈カヴァレリア〉〈ファウスト〉〈ジョコンダ〉〈フェドーラ〉〈マノン〉〈蝶々夫人〉〈パリアッチ〉等だ。氏の声は心地良く，よく響き，その流派は歌劇信奉者(ついでに言うなら，ここでは大半がそうである)を至極喜ばせる。先週の日曜日，氏は当地にてルチアで，前述のように，成功のうちにデビューした。(「オペラアーチストたち“アドルフォ・サルコリ”」 *“El Tiempo”*1911年2月12日 ページ不明)

2月12日の記事で「先週の日曜日」とあることから，演奏日は2月4日であったと考えられる。筆者はこの情報を元に，1910年2月にフィリピンで発行されていた新聞を中心に，サルコリの調査を行った。

調査の過程で，1898年に発行されたマニラの新聞”THE MANILA TIMES”に，1910年末から 1911 年にかけて，サルコリが関わった演奏活動の様子が多く取り上げられていることを見つけた。新聞記事により，サルコリは”Italian Opera Company”というオペラ団体のメンバーの一員としてフィリピンを訪れていたことが分かった。

Italian Opera Company のマニラ初演は，1910年12月10日（土）で，演目は,〈エルナーニ〉と〈トラヴィアータ〉で,12月10日のマニラタイムズには，”Manila Opera Season Opens with Ernani, Traviata to be sung on Sunday night”との見出しで，The Italian Opera Company が「これまでマニラに来た中で一番良いであろう」との記事と，出演者の紹介記事などが書かれている。(*“The Manila Times”*1910年12月10日 6面)

Italian Opera Company の初演から3日目となる12月13日（火）に，サルコリはオペラ〈ルチア〉でマニラでの初舞台を踏んでいる。前日 12 日の広告によると，サルコリの役はエドガルド(Sir Edgardo di Ravenswood)

であった。

SARCOLI IN DEBUT TONIGHT

Italian Tenor Will Make Bow Before Manila In Lucia

The Italian Opera company will offer the third opera of the season this evening when Lucia Donizetti's tuneful tragedy, Lucia di Lammermoor, will be sung. It will be the debut of Sarcoli, the Italian tenor whose fame preceded him to the Philippines, and he will sing the role of Lucia's favored suitor, Sir Edgar Ravenswood.

Sarcoli, is a lyric tenor whose voice is said to be of exceptional beauty and sweetness and his first appearance is awaited with interest by local music lovers.

The role of Lucia will be sung by Dolores Bosque who was one of the triumphs of Traviata. Her singing and acting as Violeta seem to indicate that she is especially fitted for the emotional parts of the tragic Lucia.

Amato will sing Lord Henry Ashton while Sustich, Grimoli, Salvati and Cavagna will fill the other leading roles.

(図 1)「サルコリのマニラデビュー記事」(“*THE MANILA TIMES*”1910 年 12 月 13 日 9 面)

1910 年 12 月 13 日の記事には，”Sarcoli in debut tonight.Italian Tenor will make bow before Manila in Lucia.”と見出しが付けられ，今夜のルチアがサルコリのマニラデビューとなること，そして，サルコリは「リリコテナーで，その声は並外れた美しさで，甘く，現地の音楽愛好家からは，その登場が興味を持って待たれている」と紹介されている(図 1)。

Italian Opera Company は，1910 年 12 月 11 日（日）の〈エルナーニ〉〈トラヴィアータ〉を皮切りに，12 月 13 日（火）には，サルコリのマニラ初演となる〈ルチア〉を上演，その後，12 月 15 日（木）に〈トラヴィアータ〉を再演している。

マニラタイムズで確認出来る限りでは，12 月 11 日から，1 月 25 日の期間中，ドニゼッティ，グノー，ヴェルディ，レオンカヴァッロ，プッチーニ，マスカーニのオペラを上演している。Italian Opera company が行ったマニラでの 11 の演目，のべ 29 回の上演のうち，サルコリが出演していたオペラは 6 演目，上演回数は合計 13 回であった。

役とオペラは次の通りである。①エドガルド〈ランメルモールのルチア〉②トゥリッドゥ〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉③ファウスト〈ファウスト〉④マリオ〈トスカ〉⑤フェルナンド〈ラ・ファヴォリータ〉⑥フラ・ディアヴォロ〈フラ・ディアヴォロ〉

（註：表記は役，〈オペラ〉順）

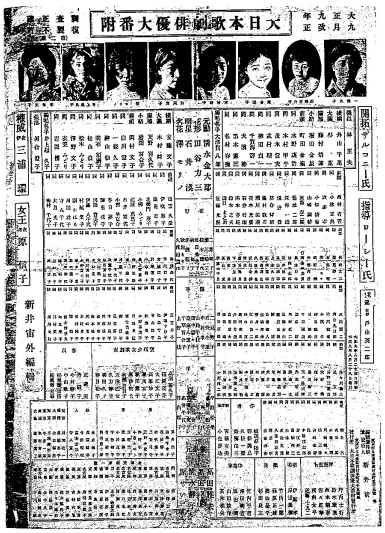
すなわちサルコリは，フィリピン公演の頃，少なくとも 6 演目のオペラのレパートリーを持っていた事が分かる。

サルコリがフィリピンで演じたレパートリーの 1 つ，オペラ〈フラ・ディアヴォロ〉のアリア「岩にもたれた」は，日本で大正から昭和にかけて浅草オペラで歌われていた。

「男爵に変装した怪盗ディアボロが真っ黒なビロードのマントに身をつつみ颯爽と舞台に登場する。(…) それだけでドッとわく。♪岩にもたれた　ものすごい人は「力チャーン！」黄色い声援，二階正面のかぶりつきには制服姿の女学生がずらりと並ぶ(清島敏典 1993:77)。これは，金龍館で田谷力三が歌う場面の描写である。金龍館を根城とし，浅草オペラの牙城を築いたのが根岸歌劇団であり，この根岸歌劇団のメンバーであった田谷力三が「岩にもたれた」を歌い大流行していた（同 75)。当時，多くのスター，スタッフを吸収していた根岸歌劇団の番付に，「開拓ザルコニー」の名前を見い出すことができる(図 2)。(清島利典: 1993『恋はやさしい野辺の花よ』大月書房)

ザルコニー以外の人物は，指導ローシー氏，重鎮戸山英二郎（後の藤原義江），権威在伊三浦環，女王在米原信子である。サルコリの弟子の三浦環，原信子を含め，いずれも日本の声楽界に大きく影響を与えたメンバーである。

浅草オペラで流行した〈フラ・ディアヴォロ〉ではあるが，オペラ界の上演回数は多くはなく，作曲者のオベールも，他の，ドニゼッティ，ヴェルディ，プッチーニと異なり，それほど有名な作曲者ではない。そのオベールの〈フラ・ディアヴォロ〉が，浅草オペラで大流行したこと，〈フラ・ディアヴォロ〉がサルコリのレパートリーであったこと，番付の特別な囲みで記された，三浦環，原信子はサルコリの弟子であったことを考え合わせると，「開拓ザルコニー」はサルコリで，〈フラ・ディアヴォロ〉を日本に紹介したのがサルコリである可能性は高い。



(図 2)「大日本歌劇俳優大番附」(「開拓ザルコニー氏」が右上に見られる。)(清島利典: 1993『恋はやさしい野辺の花よ』大月書房 76 頁)

(2)ルーマニアでの調査

ルーマニアの図書館でサルコリが活躍した当時の新聞を調べた結果,音楽に関する記事がみられたのはAdevărul紙とUniversal紙であった。よって,この2紙を中心に調査を行った。

Adevărul紙のサルコリのことが記載された記事の2つを次に訳す。( )は筆者の補筆。

「多大な功績と賞賛は,ロドルフ役のサルコリによってもたらされた。サルコリは,リゴレット,ジョコンダ,ボエームなどを歌う。サルコリは,プッチーニも歌う。歌声は,温かくつつみこむようだ。オペラでは,ダルクレ嬢(Hariclea Darclée:1860-1939)と共演する機会が多い。」(“*Adevărul*”1903年1月22日 3頁)

「オペラ前夜祭は大成功。プッチーニのボエームにおいて,今シーズン最初の成功。(…)テノールサルコリは数日でラダメスの役を準備し,本物の“力作”を演じ,衝撃的で倦怠感のある役柄を,豊かな表現力でかつ正確にリトヴィーネ嬢(Felia Litvinne:1860-1936)と表現した。

昨夜の役柄はメタリックな声で高く評価でき,また,その輝きを示した。ジョコンダにおいて,サルコリ氏のエンツォ役は非常に素晴らしいものがあった。

(アイーダでは)大司祭ランフィス,ロッシの低音や,ドロレス夫人の正確さ,アレクシウの王も非常に良く,時には熱くアムネリスを演じた。オーケストラとその特別な楽器は昨夜火を噴いた。合唱もうまくいった。第二幕のグランドフィナーレの際には,オーケストラ指揮者,モランツォーニ氏(Roberto Moranzoni:1880-1959)は暖かい拍手喝采を受けた。」(”*Adevărul*” 1906年11月17日 3頁)

記事はサルコリの声に対する賞賛であるが,今回特に,共演者として名前が挙がったダルクレ(Hariclea Darclée:1860-1939)リトヴィーネ(Felia Litvinne:1860-1936)指揮者モランツォーニ氏(Roberto Moranzoni:1880-1959)に注目した。

サルコリと「共演する機会が多い」とされた,ダルクレ穣は,ルーマニア出身,スカラ座をはじめ,イタリア各地で歌う歌手であり,リトヴィーネも,1年後にトスカニーニの指揮のもとオペラに出演,指揮者モランツォーニも,後に大成功をおさめ,アメリカで活躍していることが分かった。共演者はサルコリの「オペラ歌手」としての力量を推測するために大変重要な情報である。また,フィリピンでの演奏活動と同様,サルコリは主役を演じていた。

ルーマニアでは,1903年1月,1904年10月,11月,1906年11月にサルコリが演奏した記事を見つけたが,1910年に演奏した事は見つける事が出来なかった。しかし,同じ時期にルーマニアにイタリアのオペラ団体がオペラを演奏している事が分かった。

イタリアのオペラ団体は,1910年10月23日オペラ〈アイーダ〉を皮切りに,同年11月28日までのうち,33日,延べ40のオペラを上演した。演目は〈アイーダ〉2回,〈セヴィリアの理髪師〉3回,〈トスカ〉4回,〈椿姫〉6回,〈エルナーニ〉2回,〈マリア・ディ・ロアン〉1回,〈リゴレット〉2回,〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉2回,〈パリアッチ〉3回,〈仮面舞踏会〉3回,〈ラクメ〉3回,〈トロヴァトーレ〉1回,〈ルチア〉2回,〈ノルマ〉1回,〈カルメン〉3回,〈ボエーム〉2回であった。Universal紙上に掲載された全40公演の広告の多くは演目の記載が主であり,演奏家の名前は一部しか記載が無かったが,サルコリがルーマニアに滞在したとされる時期とこのイタリアオペラ団体の滞在時期が同じ事,サルコリがルーマニアで演奏されたとされる「カヴァレリア・ルスティカーナ」も上演していた事がUniversal紙に掲載されていたことから,この団体の中にサルコリがいた可能性が考えられる。

(まとめ)

本研究では，サルコリがItalian Opera Companyの一員としてフィリピンを訪れていたこと，Italian Opera Companyは1910年12月11日より1911年1月25日の間に11演目のオペラを上演し，サルコリはそのうち6演目に出演，いずれも主役，もしくは主役級の役を演じていたことを明らかにした。また，これまで，サルコリのレパートリーははっきりしなかったが，今回の調査で，その一部を明らかにすることが出来た。

特に，サルコリのフィリピンでのレパートリーの1つに〈フラ・ディアヴォロ〉があることに注目した。〈フラ・ディアヴォロ〉の

アリアは，浅草オペラで流行した曲であること，浅草オペラの番付表に記載されているメンバー，そして「ザルコニー」という名前から，浅草オペラとサルコリの関係が推測される。今後，浅草オペラとサルコリの関係も調査していく必要があろう。また，今回の調査により，サルコリのレパートリーと，サルコリの教授活動や弟子たちのレパートリーを照らし合わせることが可能となった。

また,サルコリの共演者を知る事は,サルコリの「オペラ歌手」としての力量,そして日本にいながらにしてつながっていたであろう,世界の声楽界とのネットワークを知る上で大変重要な情報である。今回のルーマニア調査で,それら共演者の一部を明らかにすることができた。

ダルクレ,リトヴィーネ,モランツォーニいずれもが,地方都市ではなく,ミラノスカラ座やニューヨークのメトロポリタン歌劇場などでの経験を持つ,いわば世界で活躍をしていたことが明らかになり,それら音楽家たちと共演,主役を演じていたサルコリは,相応の歌手としての力量を備えていたと考えられる。

サルコリの来日時,明治 44 年は,帝国劇場が出来た頃とはいえ,日本ではまだオペラを上演できる土壌ではなかった。サルコリはその日本に多くのオペラレパートリー,そして世界とつながるネットワークを持って来日したことを本研究で明らかに出来た。

5. 主な発表論文等
（研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1)直江　学美，ルーマニアにおけるアドルフォ・サルコリの演奏活動，金沢星稜大学人間科学研究, 査読なし, 第９巻　第１号, 2015

(2)直江　学美，フィリピンにおけるアドルフォ・サルコリの演奏活動-1910 年末から 1911 年の新聞記事より-，金沢星稜大学人間科学研究, 査読なし, 第 8 巻　第１号, 2014, pp.17-22

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
直江学美（NAOE, Manami）
金沢星稜大学・人間科学部・准教授
研究者番号：90468976

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：